

# 戦時体制下の文学者 (一)

——窪川鶴次郎論——

都 築 久 義

はじめに

窪川鶴次郎は今年の六月十五日、七十一才の生涯を閉じた。新聞の報道記事も小さく、格別に追悼文を載せたという形跡も、管見では『赤旗』以外には見当らなかつた。文芸雑誌でも『新日本文学』の菊池章一、『民主文学』の佐藤静夫くらいしか、私は見なかつた。こうした扱いはいかにも彼の現在の評価を象徴し、いわゆる戦後の「民主主義文学者」の一つの典型を具現しているようでもある。

昨年、僚友小田切秀雄が、窪川の仕事をあつめて『昭和十年代文学の立場』（河出書房新社、昭48・7）を編んだ。「窪川鶴次郎は、昭和文学の実質的代表的な批評家の一人である。かれの仕事のうちから主要なものをえらんで、いまここに一卷として刊行することの、根本の理由はそれに尽きる。」と解説している。小田切は敗戦直後ほどではないにしても、相変わらず窪川への評価は変えていないのが印象的である。

窪川が昭和文学の実質的代表的な批評家の一人であるかどうかはともかく、彼の事実上の文学的出発が昭和九年であるから、「昭和十年代文学」者であることはまちがいない。

そして、大正末期から昭和初期にかけて自己の青春時代をむかえ、そこで知的青年にとって不可避なマルクス主義

体験を通過し、やがて「転向」、戦時下の活躍を経て、敗戦とともに「民主主義」を叫んだ、という彼の履歴は、そのまま日本型インテリゲンチヤを体現する一人であることも私の興味をそそる。

戦時下知識人、なかでも文学者の動向に興味と関心を持っている私は、いまさらの感なきにしもあらずであるが、窪川の他界したのを機に、彼の戦時下の仕事と、それに対する戦後の評価について、この際もう一度検討してみたと思う。

(一)

窪川鶴次郎に「日本文学の位置」というエッセイがある。後述する『再説現代文学論』巻頭に収められている。日本文学報国会の結成式に参列したのを機会に書かれたもので、窪川独特の抽象的な文面であるために、いわば両義に解釈できて、彼を「抵抗」の文学者にする場合も、彼を権力への「迎合」者と見なす場合にも、これが引き合いに出される、つまり、これがターニングポイントとなって、吉本隆明流に言えば、第二段転向のステップを踏んだと見るか、それとも韜晦低迷しながら、あくまで「抵抗」の姿勢を堅持しようとしたのか、解釈のしようによっては、両説成立つというしろものである。

といっても、前者と見るのは比較的容易で、素直に読めばよい。ところが、後者と読むのはいささか先入観や予見的判断が必要である。とまれ、少し長いが左に抜萃する。

- (1) 日本文学報国会の結成式が本日（昭和十七年六月十八日）日比谷公会堂で挙行された。会場は文字どほり満員であった。各部代表たちの祝辞に傾聴しながら、私は深い感慨を催した一人である。

(2) 日本文学報国会要綱第二条(事業)は、その第一項に、皇国文学者としての世界観の確立、第二項に、文芸政策の樹立並に遂行への協力、と書かれてゐる。日本の文学が、全体的に完全に打って一丸となり且つ公然と、自己の課題として世界観の問題を提出したといふことは、実に瞠目すべき事柄で、未だかつて見られなかつたことである。然し、かやうなことを可能ならしめたのは、それを国家的見地において取り上げたといふことより外ないであらう。

(3) かつて思想は芸術を殺すとさへ言はれた。これまで思想が芸術によって敵視されがちであつたといふことは、何人も否定し難いであらう。かかる偏見は日本の芸術観を特色づけてさへある。この思想の敵視は、芸術の獨創性を絶対的なものとして尊重する精神に基づいてゐることは明かである。そして思想は常に芸術との対立において、和解し難い対立とさへ考えられて来た。ところが今日、日本文学の真に新たな発足にとつて、先づ第一に要求されてゐるものは、皇国文学者としての世界観の確立なのである。私たちはもはや思想についての些かの偏見をもそのままにして一歩でも先へすすむことは不可能である。

(4) 私たちが世界観の問題を特に取りあげるときは、その世界観は私たちの中にただ在るものとしてのそれではない。そのとき私たちは、新たな世界観の意識的、な形成をめざしてゐるのである。だが新たな世界観の形成は他の何処にも求められるのではない。それは私たち自身の中より外にはない。それは既に在るものとしての世界観の変革である。形成は絶えざる変革であるといふことは、私たちのよく知るところである。それは自己革新であり、不断の闘ひである。新たな世界観の形成は、単なる決意や良心や告白だけによつて為し遂げられ

得るほど、とかく簡単なものではないであらう。(略)自己革新は、どこまでも実践的なものであり、個性的なものである。そして自己革新は絶えざる自己の発見である。

- (5) 新たな世界観とその方法もまた、既に私たちの中に在るものとしての世界観の現実的な在り方と支配との複雑性の中のみ捉へられる。そこに行はれる最も実践的な、個性的な自己革新と自己発見の闘ひにおいて、獨創性が期待されない筈はない。獨創性こそ却って世界観について真の理解を立証するものである。皇国文学者としての世界観の樹立は、理論的にも、実践的にも、実に広汎多様なプログラムを必至としてゐることが想像される。(傍点原文)

平野謙は例の『昭和文学史』でこれについて「窪川鶴次郎は人国家的見地において取り上げられたこの世界観と文芸政策との関聯をまことしやかに論じたが、まずそのことを表明しておかなければ、窪川は一文学者として棲息することもできなかったのだ。」と、彼の苦しい立場と苦衷に理解を示した。当時乱れ飛んだ筆誅や「非国民」的告発を例証し、その雰囲気を伝えながら、「こういう一種の自己証明をことあるごとに表明しなければならぬところに、旧左翼作家を筆頭とする人々の苦衷があった。」と、同情する。

たしかに、あの時代には時局に非協力的素振りを見せたりする者への筆誅や、魔女狩りのような告発があちこちに見られた。そのため、時の権力者から敵視されていた一部旧左翼や自由主義者、あるいはなんらかの意味でスネに傷持つ者が、常にビクビクし、動揺し、権力に迎合的にならざるをえなかった空気が漂っていたことは事実であらう。いわゆる「転向者」の群れがとりわけ「陰惨な挑発者のまなこをたえず背中に感じ」ていなければならなかつた雰囲気横溢していたであらうことも察しがつく。

ただ、ここで注意しておかなければならないことは、実はこの「転向者」達もかつてプロレタリア文学全盛時代には、「左翼にあらざれば人にあらざり」の調子で、筆誅や告発、挑発に近い罵倒をしていたこともあった、ということである。国家権力が直接手を下すまでの数年間は、文筆業者の首を實際に押さえていたのは、出版、ジャーナリズム資本であった。資本主義は、それを否定するものでも商品となる限り利用する、という寛容さがあるから、いわゆる「商業左翼」が横行している時代に彼等からの罵倒にたえるには、相当の勇氣と自信がいる。新・旧「左翼」からの筆誅、告発、挑発はもう一度ある。敗戦直後である。「戦争犯罪人」の告発がそれである。これは結果的に、国家権力（当時は連合軍）へのものであった。「戦争反対者」と「戦争犯罪人」を同等に扱うことは異論が残るとしても、その判断をしたのはともに被権力者であったところに、問題があろう。権力者が指向している方向に、被権力者が協力し、それが筆誅、密告という形で行われたとすれば、その「被害者」の受けた動揺や苦痛、不安、それがもたらす「陰惨」な状況は、ことが「右翼」からなされようが、「左翼」から発せられようが同じだ、ということである。

ということとともに、組織であれ国家であれ、その統制が強化され、弾圧が厳しくなると、必ず、密告や告発が横行する、逆にいえばそうすることが一つの自衛手段であり、そういう形で自衛しなければならぬ、という「組織悪」や「国家悪」、さらには人間の「弱さ」ということに思いを至すと実は私にはそのことの方が気がめいる。

もう一点この時代の筆誅や告発、密告について留意したいのは、右に述べたのとは異質な、いわば素朴でむしろ誠実なそれもあった、ということである。

戦いの目的が何であれ、大多数の庶民や若者は、祖国の危機を感じ、祖国を守ることを信じ、親を捨て、妻子と別れて、異郷の戦場で命を賭けていた。にもかかわらず、一部のインテリのなかには、決意に燃えず、のみならず、反戦や嫌戦の名分のもとに、自己の「安全」に執心していたとすれば、その彼等を現実に親を失い、子を亡くし、夫を

奪れた者達が「告発」し「筆誅」したい、という感情に駆られたとしても、その切実な心情を慮れば、私はそれをい、ち、が、い、に非難できない。

その問題はさておき、平野はこうも言う。窪川は皇国主義者としての世界観を持ち出しながら、日本的世界観そのものをほとんど論じなかった。「窪川は日本的世界観などというものの非合理性を、におわすことさえできなかった。ただ世界観の問題は大事だぞ、それはレディ・メイドのものなんかじゃないぞ、としかいえなかった。こういう窪川のすがた」はまことに「哀れ」だったと。

平野の弁護の仕方はいわゆる状況証拠を強調し、いわば情状酌量を認めようというのである。もとよりその前提には、彼の「前歴」から推測して「旧左翼」は、権力に基本的には抵抗した、という認識がある。幸いなことに、窪川は林房雄に代表されるような鮮かな「転向」ぶりを露呈しなかったから、「偽装転向」説も可能であった。そこに彼の「救い」があった。このエッセイのように、世界観一般を論じた文章を抽出すれば、両義解釈できるので、平野のごとき見解も成立するのである。

しかし、次の点を考慮すればどうであろう。

第一点は、もともと文芸評論家として出発してからの論文、エッセイはほとんど一般論、原則論、原理を述べている。後で詳述するが、民族論、「人間に還れ」論、「政治と文学論」等について、明確な自己の立場を表明していない。それは偽装などではなく彼の資質、性格の問題である。

第二点は、彼の「後歴」から類推すれば、この時点の彼の姿勢は明白である。日本的世界観ということでは、たとえば、「現代の超克」といった際どいエッセイもある。この内容は省くが、このエッセイが「皇国文学叢刊」の一著『超克の美』（昭森社、昭18・9）に収載され、執筆陣の顔ぶれのなかには、蓮田善明や藤田徳太郎のいること

を想起すれば、何を意味するかは容易に理解できる。

第三点は、引用(3)以降で明らかなことは、かつてのプロレタリア文学論の裏返しであることは瞭然としている。思想と芸術の対立という発想は、反プロレタリア文学者の常套手段であった。その偏見を今こそ正せと言っているのである。ごていねいにも、「単なる決意や良心や告白だけによって為しとげられる」のではなく、実践と態度で示せと言わんばかりの発言であって、権力にとってこれほど力強い主張はない。

第四点、この点がむしろ一番疑問であるのだが、窪川がなぜ、「自己照明」を必要としたのだろう。平野は窪川への筆誅を例示しているが、あの当時の筆誅は「旧左翼」だけではない。戦後厳しく指弾された尾崎士郎でさえ、受けている、というよりは、誰彼かまわず、あったといった方がよからう。後述するとおり、窪川は昭和十四年から二十一年までの、極端に出版情勢の苛烈な時期において、六冊もの著書を世に出している。年譜を見れば、『新潮』とのかわりが一番深く、あちこちの座談会に顔を出し、『文学者』の同人に顔を連ね、『中外商業新聞』では文芸時評も担当している。「自己照明」が必要なほど、彼は「危険」視されていたのであろうか。

## (二)

小原元は、『国文学』の「特集・昭和十年代の文学」（昭40・6）で、「戦時下の窪川鶴次郎の評論」を論じている。

小原の論文は、戦時下の窪川の評論活動の中心軸が、『現代文学論』（後出）と『再説現代文学論』（後出）にあることをまずおさえ、それを強調して、こう続ける。

両書をつらぬく基軸をなす論点は、前近代の人間抑圧から人間の尊厳・解放という文学的たたかひの伝統をきり

ひらいた近代文学観念の恢復、再生であった。すぐれて「人間中心の文学思想」に、人間抑圧のフアツシヨ的時代の文学的批判の足がかりをもとめたといつてもいい。理論的には近代文学思潮の形成・解体の歴史過程をあきらかにする「文学論的文学史」という問題意識が根底にすえられたのである。

つまり、小原は、窪川が敗戦直後に『人間中心の文学思想』（後出）の「はしがき」で力説していることをそのまま肯定して、その視角から論を發展させる。そして、前述二著の、「後記」と「あとがき」を引用しながら、この兩著の基本的立場は同一であること、すなわち、窪川の立場の一貫性をそのことによって説明するわけである。その理由は、『再説』の方の「あとがき」に、「本書は、時期の上から言って前著に直接つながってゐるもので、後続するものとして時代的関連を前者に対して持つてゐる云々」と書かれてゐるからである。

ところが、この「あとがき」に後半で「時代の飛躍的な發展に伴ひ、且つ、ささやかながら国家の要望に応へようとする私自身の努力によって、私は絶えず自分の立場も一新せしめようとして来た。だから前書の書かれた時期におけると同じやうな態度で、現代文学を論じたといふ意味は、本書の題名には毛頭含まれてゐない。」と書かれてゐるためややこしい。「両書はほぼ同じ性格を持つてゐる。このやうな性格を持ったものは、私の著書の中に他にはない。敢へて再説と名づけた所以である。」と書いた前半部と矛盾してゐるかに見える。

武井昭夫がこの点を突いて窪川<sup>（注し）</sup>の交節、「客観的に異質なものに変貌」した、と非難したのを、小原は「△転向▽文学者として執権にマークされている著者が、昭和十九年という時点に刊行された自著への苦しいつけたりであることを見ぬくことは両書をつらぬく論旨からむずかしいことではなかった。」と、どこまでも窪川の「一貫性」にこだわる。が、武井のみなし方は「正しいよみとり方でない。」とする小原の読みとり方が正しくない、と思う。な

ぜなら、前半で言っているのは、あくまで著書の性格——ここに私の仕事の本道があること、私の仕事の中心をなすもの——の同一性を述べたのであって、「論じ方」の「態度」の同一性を述べてはいない。単に内容が連続的で、態度も同じならば、『統』とすればよいのであるが、「態度」が変わったので、『再説』とした、と説明しているのである。「自著への苦しいつけたり」どころか、堂々とした自己変革の宣言書である。念のために、十九年よりも、二年前、十七年七月に出た『現代文学思潮』（後出）の「あとがき」を左に引く。これならば、誤読はなかるう。

この十年間、改めて断るまでもなく、私は私なりの自己革新を些か努力してきたつもりである。然かしこの十二月八日以後、殊に前記の六十枚といふ稍々まとまった文章（都築注「新たな展望についての覚書」）を書いてみて切に感じたことは、今日ではもはや、諸々の思想の轉換は容易であるといふこと、今日の事態は、思想を思想として轉換せしめることが容易であるほど力強く發展しつつあるといふこと、今日の私たちにとって努力の中心をなすものは、一に、私たちの体的、質的轉換にあるといふこと、それは一般に考へられてゐるほど容易な業では決してないといふことであつた。（中略）過去十年間には、文学など止さうと思つて、といふのは自分の才分に絶望して、一週間くらゐ不貞寝してゐたこともある。が今後の十年間の文学に対する想像の上では、私はただ、輝しき日本国家の偉業に応へて、日本文学發展のためにひたすら挺身努力したいと希ふのみである。（傍点原文）

さて、この論考で、それでは、問題のエッセイ、「日本文学の位置」を小原はどう説明し、解釈するかというところ、これがまた興味ある見解を示している。さすがに、「皇国主義世界観」が意識的に加えられていったことや、あからさまな迎合的形容、表現が多いことは認めざるをえなかつた。もちろん、それは、「急速度に思想弾圧の度を加えて

いった時代、情勢の悪化にもなつて」というただし書がついている。そのうえ、前述の平野の発言を援用しつつ、結論として、

窪川はことごとくに「皇国文学者としての世界観」を正面にかかげることによって、「苦勞して『世界観と文学』」（平野謙「日本文学報国会の成立」六一・五）についてかき、「皇国文学者」ならぬところの世界観について身をくねらすように論じねばならなかつた。（中略）痛ましいほど右翼的修辭をあやつりながら「皇国文学者としての私たちの誉高き責務」が立証しようとしたのは決して皇国主義世界観についてではなく、世界観と芸術の獨創性の關係だつたのである。

なるほど、よく読めばここには、むやみに「世界観」という言葉は頻出するものの、その具体的なことについては陳述されていない。すくなくとも、あの神がかり的な「皇国主義世界観」は明示されているわけではない。このエッセイでは、日本文学報国会の結成式に列席して感激したこと、東条首相の言葉にぎくくつとしたこと、国家的見地で世界観が提出されたことに瞠目したことなどが書かれていても、その世界観の内容が縷々とは説明されていない。小原元はこの点に着目して、「世界観」が具体的に説明されていないから、「皇国主義世界観」を立証しようとしたのではないこと、別言すれば小原は明確にしていないが、そのことによって、「皇国主義世界観」への批判を暗示していることを言おうとしたのであろう。

小原の言うとおり、窪川はここで「皇国主義世界観」の内容を解明し、それを立証しようとしたのではないけれども、「皇国主義世界観」の確立を要求した日本文学報国会の姿勢に賛意を表したばかりか、「国家的見地」で「世界

観の問題を提出した」という事態に「瞠目」までしていることは、引用文からだけでも判然とする。そこには、苦しませるの「世界観」論を述べたとは思えない。のみならず、おそらく彼のマルクス主義世界観体験を思い出しながら、親切にも、自己変革の仕方、自己革新の達成の方法まで説いているとしか私には思えない。なまじこういふ論法の方が、知的心情をゆさぶって、結果として知識人を鼓舞するのには効果があるのではないか。

いったい、もし彼がここに「皇国主義世界観」へのなんらかの抵抗を暗示している、というのなら、わざわざ文学報国会の文章を書く必要はあるまい。またジャーナリズムの側から言えば、昭和十七年の時点で、窪川にその懸念があれば、書かせはしまい。

前項で平野の見解に疑問を呈しておいたとおりであるから、私は窪川に対して、平野の言う意味での「苦衷」も「哀れ」も感じない。したがって、小原のように、「身をくねらすように」して「皇国文学者」ならぬところの世界観を述べる窪川像もとても想像できないのはいうまでもない。

小原は結論として、窪川はこのエッセイで「世界観と芸術の獨創性の關係」を「立証しよう」と言う。「世界観と芸術の獨創性」を何も文学報国会の結成式の感想に書く必要もなからう。その種のことを主張したいなら独立したエッセイで書けばよい。

再説になるが、たしかに窪川は、「皇国主義世界観」を「立証しよう」としたのではない。が、「世界観と芸術の獨創性の關係」を「立証しよう」としたのではない、と思う。

私の考えでは、窪川が「立証しよう」としたのは、「日本文学の真に新たな発足にとって、先づ第一に要求されている」ところの「皇国文学者としての世界観の確立」をいかにして達成するか、ということである。換言すれば日本文学報国会要綱を、どのようにして実践するかを「立証」しようとしたのである。

その具体案として、引例(3)のように、過去の思想と芸術の対立という偏見を捨てよ、引例(4)で、この世界観を確立するために、絶えざる自己革新が必要である、そして引例(5)でその実践の方法には、個性的や獨創性が認められることが、「世界観について真の理解を立証する」と、提案する。

つまり窪川はここで「余は如何にしてマルクス主義者になりしか」を思い出して、「余はいかにして皇国主義者となりしか」ならぬ「なるためにはいかにするか」を述べたのである。

そこに窪川の目的があり、そのことが主旨である以上、「皇国主義世界観」や「日本的世界観」の内容を開示し、立証する必要がある。

私がこのエッセイで一番注目したのは、引例(2)の「日本の文学が、全体的に完全に打って一丸となり且つ公然と、自己の課題として、世界観の問題を提出したといふことは、実に瞠目すべき事柄で、未だかつて見られなかったことである。」という一項であった。

彼はしばしば、プロレタリア文学の壊滅の状況を叙述するくだりで、マルクス主義の世界感、思想体系が、「単なる観念上の思想として、人々から遊離して」いき、「人々はその世界観を自分の外にある、所与の思想体系として見るやうになった。」ために、「自己の無力感と方向の喪失と動搖」(「文学に於ける虚構の真実」)をきたしたことを告白的に述べている。信ずべき、寄与すべき世界観や思想を喪い、「如何に生きるべきか」を叫ばずにはいられなかった心情を「一般的」な現象として叙述しながら、おそらく彼自身の心情の吐露として書いている。また、彼の評論の結論に、なんと「新たな文芸思潮の要望」の類の多いことか。借物であったとはいえ、かつて手にした世界観は、国家権力の弾圧によって潰され、そのことによって、借物でしかなかったことを自覚させられ、方途を失い、新たな思想と安住できる世界観を模策をするなかで、今度は強力な国家権力によって「世界観」の確立が提唱されたの

である。それがマルクス主義世界観と背反するものであることに気がついたのは戦後のことである。

とにかく、政治の優位論は敗れ、文学と思想（政治）は対立するものとして捉えられてきたこの数年間であった。それがいま再び、文学者間の個人的論争としてではなく、国家的見地から、提起されたことに、感無量のものがあり、その感慨が上記の言葉となって顕現したのではないか。

(三)

窪川鶴次郎の最初の文芸評論集『現代文学論』が、中央公論社から出版されたのは、昭和十四年十一月のことである。以来二十年までの間に、次のような評論集、エッセイ集が世に出た。

『現代文学論』	中央公論社	(昭14・11)
『文学の思考』	河出書房	(昭15・11)
『文学の扉』	高山書院	(昭16・4)
『文学と教養』	昭森社	(昭17・5)
『現代文学思潮』	三笠書房	(昭17・7)
『再説現代文学論』	昭森社	(昭19・4)

そして、戦後、価値観が逆転し、戦時中の出版がほとんど再刊の陽の目を見ない時期、彼は右のなかから時流に即していると考えられる論考をピックアップして、三冊の著書にまとめた。

『現代文学研究』 九州評論社 (昭22・10)

『人間中心の文学思想』 解放社 (昭22・12)

『文学・思想・生活』 新星社 (昭23・11)

このうち、前二著はその大部分を、『現代文学論』及び、『再説現代文学論』から、三著目は、『文学の思考』から再録している。

『人間中心の文学思想』刊行の「あ、旋と企かく、」(傍点原文「はしがき」)をした小田切秀雄は、自ら同著に解説を寄せ、戦時体制下の「暗い日々の下で、烈風に吹き消されることなく暖かい燈火を文学的にもしつづけたいくたりかのひと」の一人として、窪川鶴次郎の評論をいちはやく評価したことは、よく知られているよう。そして、彼は、「もはやプロレタリア文学運動の時代のように公然と文学を社会変革に結びつけて行くことのできなくなつた条件のなかで、一步後退しながら、逆にまたそのことでプロレタリアートをもふくめての日本の民衆全体が負わされてゐる半封建的、ファッショ的抑圧の巾広く興行きの深い現実にはたと密着した新しいたたかいを展開したのであつた。」と続け、この解説を自著『民主主義文学論』(銀杏書房、昭23・6)に収録するときには、「戦争下の達成——窪川鶴次郎の理論的な仕事」と題して、その意義と価値を認めた。

窪川鶴次郎自身も、自らの戦時中の仕事をふり返えって、同著「はしがき」で、こう語る。

戦時中の自分の仕事の上で、絶えず私の努力を無意識のうちにも支配していたものは、近代文学がどのような様相をもって、どのような過程を辿って崩壊してゆくか、その過程はどのようにしてファッシズムと結びつくこと

によってその崩壊を速めてゆくか、ということを明かにすることが一つであった。(中略)

上記の一つの努力に対して、私の一貫して眼を注いで来たもう一つの問題は、大正の末以来、新たな世代の作家たちが登場するにつれて、新たな文学を特色づけているものは、「人間中心の文学思想」がますます失われてゆくということであった。(中略)

文学における人間性のようご、——それは封建的抑圧やわい曲に対する人間性のようごのみでなく、それは同時にファッシスト的帝国主義の支配によるあらゆる抑圧とわい曲に対する人間性のようごでなければならぬ。しかし戦時下において私は、近代の歴史が中世の非人間的支配に対する解放のたたかいにおいて、人間の独立、尊げん、権威のためにたたかった、その歴史的モメントの持っている意義を強調するという方法によって、文学のファッショ化に対してたたかい、そのファッショ化の必然的な意義を明かにしてゆくよりほかはなかった。しかしそれは直接には運動としてではなく、個人のたたかいとして行われた。(中略)

かつての人間性ようごのためのたたかいは、プロレタリア文学ようごのためのやむを得ぬ最低要求という意味で行われた。そのたたかいは、「受身」の「抵抗」という形において行われた。(傍点原文)

窪川鶴次郎の戦時下の二つの仕事のうち、彼の言う「近代文学がどのような様相をもって、どのような過程を辿って崩壊してゆくか」についての論考は、『現代文学研究』に収められ、もう一つの「人間性ようご」のためのたたかいの跡づけの論文は、『人間中心の文学思想』に収録されている。

前者の目次を一瞥してみると、「現代文芸思潮の帰趨」(原題「新たな文芸思潮の要望」)、「最近の文学意識の諸現象」、「文学の通俗化と純粹小説論」、「芸術至上主義の現代的悲劇」と続き、「私小説の運命」といった私小説論

も入っている。すなわち、本多秋五の要約(在り)を借りれば、ここには「昭和八年後半からの所謂『文芸復興』の現象——自意識と不安の文学論——転向文学——ロマン派の文学論——行動主義の文学——純粹小説論とその実践——日本文化主義の文学での現われ」と、『現代文学論』の前半部が再録されているのである。念のために言えば、後半にあたる農民文学、戦争文学、報告文学、生産文学についての論考は、戦後版で削除されている。

要するに、『現代文学研究』に収められた論考は、彼が文壇にデビューした昭和九年から「農民文学」等の国策文学が喧伝される前までの文壇現象を、現場批評的に論じたものである。

しかし、問題は、彼の文壇現象批評がはたして彼の言う「近代文学がどのような様相をもって、どのような過程を辿って崩壊してゆくか」、そしてそれが「ファシズムと結びつく」プロセスをよく解きえているかどうかであろう。こころみに、彼がこの著の「はしがき」で、「本書の中心軸をなすもの」と自負する「現代文芸思潮の帰趨」を見てもみよう。

この論考は一口に言へば、「支那事変」前後から台頭してきた民族主義、日本主義を論じたものである。『中央公論』の昭和十二年二月号に、「新たななる文芸思潮の要望」と題して発表され、一部語句の訂正削除をしたうえで、同題で『現代文学論』に所収され、戦後上記の題名となった。

おそらく、窪川がこの論文でもっとも強調し、力説しなかったのは次の一点である。

横光利一氏や小林秀雄氏や林房雄氏が、最近になって、打ち揃って「日本」に感謝し「日本人」たる信念をしはば告白してゐることは、インテリゲンチアのこの上ない現代的カリカチュアとして、時代の急激な変化をもの語ってゐる。彼らは、私たちが祖国を有する日本人でないと主張してゐるのも思つてゐるのであらうか。祖国

を愛しないとも言ふのだらうか、彼等以外のものは。彼らのかかる告白の本質が、批判的精神の喪失、現実の無条件的肯定、要するにインテリゲンチアの驚くべき知性の衰頹を示してゐることは明らかだ。

なぜ、それが「インテリゲンチアの驚くべき知性の衰頹」かといへば、「第一に、何が民族的特性であるかについての識別をなさうとしてゐないことである。その特性が如何なる時代の所産であるかについての、歴史的見地からの考察をなさうとしてゐないことである。さうして、如何なる民族的特性が今日の我々の生活にとつて、保存し、発展せしめらるべき価値あるものであるかといふ評価の精神を、殆ど全く發揮せしめてゐないことである。」からだ、と彼は説く。彼によれば、「内容から切り離された」民族の「特性の讚美」を繰り返しては、「インテリゲンチアの知性の衰頹」である、というのである。

なるほど彼の論考には、「民族」の意味の変遷、スターリンの下した定義（ただし『現代文学論』にはスターリンの名は削除されている）の披瀝、北村透谷のナシヨナリズム、岡崎義恵の日本文芸思潮論への批判から、アリストテレスの詩学に至るまで、彼の有する知識が総動員され、外見的には「インテリゲンチア」ぶりが發揮されている。

そこで窪川は、この論考を戦後再録するにあたって、スターリンが引用され、透谷が称揚され、なによりも戦時下の悪名高きイデオログであった横光、小林、林達を非難していることに着眼し、これこそ「受け身」であったとはいへ「抵抗」の書として価値あるものと判断し、この論考が「中心をなすもの」と言ってしまったのではないか。しかし、彼のこの論考は肝腎な点を見落し、彼は全く錯覚している。

そもそも、民族主義が台頭し、日本主義の氣運が昂揚していたこの時代に、彼はそのこと自体を否定しなかつたばかりか、堂々と調子を合せているのである。

民族主義が排外主義と裏腹の関係にあり、民族主義が強調されれば、排外主義を生じることが不可避である。排外主義を前提とする戦時体制下にあつて、民族主義が鼓舞され、愛国主義が強調されるのは、それゆえ自明の理であるはずである。

だとすれば、窪川が「抵抗の文学者」たることを欲するならば、彼は民族主義を拒絶し、そのために起こる非国民たることの非難も甘受しなければならなかつた。

しかるに彼は、「彼らは、私たちが祖国を有する日本人でないと主張してゐるでも思つてゐるのであらうか。」と、逆に自分達こそ「愛国者」だと誇示しようとしてゐるのではないか。のみならず、横光、小林、林達の民族主義の宣揚は、内容がなく、ただ讚美してゐるばかりであるが、自分のはそうではないのだ。「インテリゲンチヤの知性の衰頹」のない、まさしく「インテリゲンチヤ」の「知性」の産物たる「民族主義」だと、まるで「民族主義」を競つてゐるようでは論外である。

もとより、窪川の論考のどこにも、具体的な民族の特性は提示されていなく、ペダンチックに民族一般論が展開されてゐるにすぎないが、なまじ術学的に「知性」を装つてゐるために、無邪気に「日本人」であることを讚美している者より、悪質であるときえ私には考えられる。彼が、「反動文学者」を批判すること、革命の指導者の文献を引用すること、それが即「進歩的」文学者であり、それが「プロレタリアようご」に通じると思つていたとしたら、彼の認識の程度が了解できよう。

さて、この著書にはもう一点興味深い論考が収められている。「芸術至上主義者の現代的悲劇」(『新潮』昭12・10)である。

「今日の純文学の最大の不幸、悲劇は、純文学自身の政論的傾向といふ事実である。」に始まるこのエッセイは、純

文学が「『政治的価値』を生むこと、あるひは『政治的な評価』を受けることを拒否する。いわゆる政治なる概念から全く絶縁された領域に己れの世界を確保し、発展せしめる。一切の政治的な干渉、侵入を容認しまいとする」建て前にもかかわらず、「純文学の先端は、いつの間にか政論的傾向の冒すところとなつてゐる。」こと、つまり「芸術至上主義」者の自己矛盾を突いたものである。ここでは、小林秀雄、伊藤整、佐藤春夫、萩原朔太郎、河上徹太郎が狙上へのぼり、結論を次のように結んでいる。

（こ）（註、河上の所論）では政治も民衆も、眞実には文学自身の対象となつてゐない。文芸本来的特性や機能がどこに働いているのであらう。文学自身の対象となしえず、自己独自の概念として消化し得ないで、単に与へられた概念としての、政治や民衆に機械的に結びついてゆく——それは純文学の政治的カリカチュアであり、文学としての確固たる支柱を失つた純文学の本質的側面を暴露するものとして今後の動向は注目に値する。（傍点戦後）

断るまでもなくこの論難の仕方は、かつてプロレタリア文学花やかなりし頃、「芸術至上主義」の徒が、窪川達を論駁した発想と論法である。戦時体制の強化とともに、国策文学や日本主義が隆昌をきたし、文学者がその風潮にしないで帰一していくさまと、かつてのプロレタリア文学運動の勃興と発展に文学者が帰順していったさまを重ね合せ、そこに両者の同位相を素早く発見した彼は、早速その当時の論法を逆用したわけである。

まさに、彼にとっては、当時の文学者達が「政論的傾向」に冒されていく姿は、昔日の自画像を見る思いであつたにちがいない。

そのことに気がつけば、もはや彼等を詰問することは簡単であった。かつて論敵の使った筆法を、そっくりそのまま返せばよいからである。ただし、それは通常苦痛をとまなう。だが、この論考のどこにも私は、彼の痛みも、苦痛も感取できなかった。窪川の「発見」と指摘が卓抜したものであっただけに惜しい。

#### (四)

次に、前項で述べた窪川のいう二つの仕事のうちの後者、「人間性のよう、ご」のためにたたかた論文集という『人間中心の文学思想』の検討に移ろう。

この著書の基調論文が、書名ともなった「人間中心の文学思想」であることは当然である。これは『現代文学論』の巻末に収められたものであり、彼の説明によれば、巻頭の「人間に還れ」（『新潮』昭14・6）に照応せしめようと「本書の一応の締括りとして書かれた」ものであり、この著のために書きおろされた。

それでは、窪川の説く「人間中心の文学思想」とは何のか。彼はそれを次のように言う。

ここに私の言ふ人間中心の文学思想とは、何らかの特定のヒューマニティの概念をその基礎に持っているわけではない。従ってそれは、人間の当為、理想を意味してゐるわけではない。

ただヒューマニズムの思想が、人間性の尊重、人間の解放の思想として特定の歴史的時代に、一定の歴史的条件に基づいて発生した、その根本的な契機に即した意味においてのみ言はうとしてゐるのである。（中略）人間中心の文学思想とは、この最も根源的な、一般的な意味にほかならない。

戦後の再録文では、「特定の歴史的時代」や「一定の歴史的條件」や「根本的な契機」といった個所に傍線が付き

れていて、小笠原克も指摘するように「 $\wedge$ 人間性ようご $\vee$ が $\wedge$ プロレタリア文学ようご $\vee$ であったかのごとき $\wedge$ 特定 $\vee$ の雰囲気をかもし出すけれども」これをそう読み取るには、相当な先入観を必要とする。この引用の前には、「ヒューマニズムは近代社会の成初期における、近代的思想の先駆であったと言はれ、それは中世封建社会における人間性の抑圧や歪曲に対する人間性の尊重、人間の解放の思想であったと考へられてゐる」と、わざわざ「ヒューマニズム」についての一般論が説明、解説されている。どのように強弁しようとも、ここでは、ヒューマニズム一般論を指しているとしたか、感取できない。

余談ながら、窪川の戦後再録文には、むやみに傍点が付されている。時代の風潮を考慮し、一定の効果を意図したことが判然としていて残念である。

それはともかく、窪川の視座がこのようにヒューマニズムを「人間の当為、営為を意味してゐ」ないところにあつた以上、「私にとっては今日の文学が人間に就いて如何なる主張や思想を持つてゐるかは問ふところでない。ただ今日の文学作品に、人間が如何に描かれてゐるかといふことだけが問題なのである。」(傍点戦後)と揚言したのは当然の帰結である。

その立場に立つて、彼は「人間に還らねばならぬ」こと、「自分自身に還る」ことを繰り返えし主張したのである。このことは、エッセイ「人間に還れ」(前出)の次の記述と照応する。

私たちは、手先ではなく、作者の人生によって創られた文学を要求する。平凡ではあるが、先づ作者自身の生活の必然性から生み出されたものであり、その必然性に随つて作者自身の内的経験を通したものでなければならぬ。それは作者の人生の一部であることを意味してゐる。作者の全人格、全生活を支配してゐるものが、作品を

隅々まで支配してゐるやうな作品、これを手つとり早く言えば作品の人格とも言ふべきものが現在の文学には稀なのである。

周知のように、プロレタリア文学の全盛期の頃、これを攻撃する論法は大ざっぱにいつて二つあった。第一点は、前に引いた窪川の文章も語っているように、政治と文学を峻別し、政治的価値と文学的価値を隔絶する立場から、プロレタリア文学のいわゆる政治の優位性論を論撃する方法である。第二点は、戦前における小林秀雄、戦後における吉本隆明とそのエ.ピ.ゴ.ネンに代表されるやうな、プロレタリア文学者やその推進者達の、現実や実感を無視した観念性や偽善性を剔抉して、理論内容そのものよりも、それを信奉し、それを宣揚する者達の生きざまを直視して、彼等の自己矛盾や主体性の欠如を非難する論法である。

実を言つて、第一の方法はほんとうは大変困難なことである。そのため、あれほどかまびすしく論議されながら、政治と文学の関係は少しも明かにされず、結局両方が開き直るか、論者自身が混乱に陥つてしまふという仕末であつたことは現在とてもあまりかわらない。

それに対して、第二の方法は容易であつた。マルクス主義やマルクス主義的文学論と直接対峙し、それと対決するとなると、マルクスと同等かそれ以上の力量を必要とするが、単なるその思想の宣伝者と対決するならば、その必要はないからである。つまり己れと同程度で充分である。

もともと当時のマルキスト(?)達は、その思想を己れの実体験から体得し、それを体現した者ではなく、文献から得た知識を鼓吹し、いわば知的遊戯に耽つていたにすぎなかつたのだから、その足許たる現実の彼等の生活実態を直撃すれば、彼等の言動はたちどころに崩壊したのである。知識人固有のタテマエ論による論戦を避け、共有するホ

ンネでそれを撃つことは、知識人としての若干のプライドが傷つく懸念はあるものの、その点を無視ないしは、開き直ってさえしまえば、もはや勝負はついたも同然であったからである。

ここに引いた窪川の「人間に還れ」とは、他ならぬプロレタリア文学攻撃法のうち、私のあげた第二点目の方法と同じ論法を逆用していることは、異論の余地もなく見えすいている。

すでに前項で述べたごとく、「純文学自身の政論的傾向」を見抜いて彼が、そのもたらすであろう結果やそれが惹起するもろもろの弱点を予知することは困難なことではなく、そればかりか、その批判の方法までプロレタリア文学論争で身につけていたために、たかまりゆく国策文学横行の時流に対していちはやく、それを応用したわけである。

しかしこの二つは、たしかに外見上は類似していて、ともに政治の優位性に支配されているとはいえ、それにかかわった知識人の意識や感情は同一ではない。つまり、内発性、実感性からいえば、この両者には顕著な相違がある。その点を窪川は見落しているのも、一見、現状批判の体裁を整えているけれども、根本的な批判にはなっていないのである。前述した日本主義、民族主義批判と同じ轍をここでも踏んでいる。

ところで、この論文集には二人の作家論が収録されている。一人は島木健作、他の一人は小林秀雄である。島木健作論は、窪川の作品のなかでは秀逸なものとして、あちこちで紹介され、論評もされている。窪川が島木に執心し、何度も彼を論じていることも私には興味をそられるのだが、窪川の一連の文壇時評を通読すると、彼が常に小林を意識し、小林の言動に気を配っていることがありありとうかがわれて、この方がいっそう私の興味をひく。

この論集に収められている小林秀雄論は、「ブルジョア批評の本質」の総題のもとに三篇ある。むろん、この総題は戦後版にいかにもふさわしいものだが、皮肉なことに、どこにも「ブルジョア批評の本質」は描破されていない。

おもしろいのは、小林の「私小説論」を論じたエッセイ（『読売新聞』昭11・7）で、窪川が「私は小林氏の評論

は、いろんな意味で自分の評論生活の道場みたいなつもりで眼にふれる限り読んできた。」と告白し、「小林氏ほど文壇心理に通じ、これを評論の対象として扱った批評家はゐなかつたに違ひない。」と、小林の文壇心理に通じている点に着目していることである。このことは、三年後の「小林秀雄論」（『芸芸』昭14・11）においても、「小林氏の評論の対象は、ある事柄や、ある論理が重要なのではなくて、それらにまつわる心理が重要なのである。」（傍点原文）と、再び言及し、前述の「私小説論」のエッセイで述べた「私は彼の舌の味ききにはいつも注意を惹かれてゐる。そのおしゃべりそのものや、彼がそこから引き出した結論に共鳴できることはあり得なくても、彼の作品鑑賞はしばしば私にとって勘どころに当ってゐるのである。」ということを、ここでも言い、ついには、「私の小林秀雄論は多少小林的になつてゐるかも知れない。」とまで白状していることと併せ考えると、実は窪川の正体を露呈しているように思える。

窪川は、彼の小林秀雄論のなかで、徹頭徹尾「ブルジョア批評家」小林を否定しようとする。しかし、そのことに熱を上げれば上げるほど、どうやら窪川の自画像が浮かんでくる。

「彼の評論は失ったところから始まつてゐるのであり、語るべき自己を持たないところに彼の評論のいはゆる自由と潑刺さがあるのであり、まして彼の評論の中に自意識する精神の世界など発見することは、彼の評論の中に多少とも一貫した思想的なものを見出すより困難であらう。」

「小林氏の論理のトリヴィアリズムは、同時に否定のトリヴィアリズムでもある。彼は決してものの本質において否定的モメントを突きとめようとしたことはない。従つて彼は否定を發展させようとはしない。否定は常に断片的な否定にとどまる。論理のトリヴィアリズムを満足させるに過ぎない。」

窪川の小林秀雄論を、私はほとんど肯定しないけれども、窪川が小林を「文壇心理に通じた」文学者と見ていた点や、ここに引いた小林論が、すっかり窪川自身を語っているのは、所詮、評論とは他人をダシにして己れを語るにすぎない、と言った小林秀雄の言説がアイロニカルに私の目に浮かぶ。

窪川は結局、「小林の評論を眼にふれる限り読ん」で、彼の発想の一面や論法技術を表面的には擲みえたから、それを一時期応用できたものの、時局が熾烈になって、政治と文学の関係を云々しているような余裕もなくなってくる、いつまにか、彼本来の資質や氣質を暴露し忠順な一人の「日本人」となっていったのである。

「事変に黙って処した」小林がしだいに寡黙になったのに比較して、窪川はむしろ多弁になった。敗戦直後にとつた窪川の「抵抗文学者」づらは、それ故みじめであった。

(五)

昭和十六年十二月八日は、文学の領域においても今後あらゆる場合に決定的な意味をもって想起されるに違ひない。勿論文学がこの日を境として全く面目を一新するといふことはあるまい。また僅か一か日にして面目を一新するやうな変化が起り得る筈もない。しかし、面目を全く一新するやうな変化が起り始めてゐることは明かである。また文学自身にとって面目を一新しなければならぬであらう。

ところで、この変化は、まづ文学者達の十二月八日に対する感銘と感動、特に大戦の詔勅に対する感激を告白した文章の中に認められるであらう。(中略)十二月八日に対する感銘と感動とは、一億一心における全国民の感銘、感動であらう。国民の一人として、その感銘、感動に変わりあらう筈はない。この感銘、感動を内省することは、これを文学の世界において、文学のことを考へるといふ意味で内省してゆくことでなければならぬ。つまり

十二月八日に対する感銘、感動を内省するといふことが、同時に所謂、文学するといふことでなければならぬ。特に文学における現実の事態と結びつけて内省は深められねばならぬであらう。

(「新たな展望についての覚書」)

小田切進の編んだ「十二月八日の記録」(『文学』昭36・12、37・4)を読むと、この日の文学者達の「感銘、感動」の状況があざやかに彷彿としてくる。

「本来賑やかなもの好きな民衆はこれまでメーデーの行進にさへ、ただ何となく喝采をおくってゐたが、この時(「満州事変」)クルリと背中をめぐらして、満州問題の成行に熱狂した。(中略)階級の問題と民族の問題について、イザといふ時日本の大衆が、どっちにより深く魂をゆり動かされるものであるかが、これで明かになった。」(杉山平助『文芸五十年史』鱗書房、昭17・11)やがて、「支那事変」が勃発し、多くの作家達が戦場へ赴いた。「その作家たちの多くは曾つては同じやうなインテリゲンチヤ意識の所有者であつたものが、ひとたび鉄火の洗礼を受ける」と、忽然として日本人に還元したものである。(同前)そして「大東亜戦争」の開戦。「さはれ彼ら(インテリゲンチヤ)のその旧意識も、時代の深刻化とともに、徐々に壊滅しつつあつたところへ、昭和十六年十二月八日の朝がきた。対英米開戦の大詔は降下した。真珠湾における米國太平洋艦隊は一朝にして全滅した。それはまさに一種の神事として祈念せらるべきものだった。一切の紛々擾々たる知性的論弁を越えた絶対境であることを、その日の朝全日本國民が感得した、血の戦慄である。」(同前)。

いったい、「知性」とは何であるのか。「インテリゲンチヤ」とはどのようなことをいうのであろうか。

「ひとたび鉄火の洗礼を受ける」と、これまでの國際主義の標榜も忘れ、「忽然として日本人に還元」し、崇敬し

てやまなかつた米英に対して、奇襲作戦の成功により「米國太平洋艦隊」が「一朝にして全滅」すると、「血の戦慄」を覚え、「感動、感銘」したとすれば、なんとまた「知性」のはかなく、「インテリゲンチヤ」の脆弱なことか。そして逆に、「鉄火」の一撃のなんと強く、「平素は兄弟いがみあひをやつてゐても、ひとたび共通の大敵があらはれ民族の危機に直面すれば、まるで別人のやうに団結する。二千六百年間、狭い島の中で、同じ血液のものが、唯一の皇室をいただき、同じ釜の飯を喰つて来たといふ地球上無比の国柄」（同前）の強靱なことか。戦時下における文学者、知識人の言動を知れば知るほど、私は如上のことを痛感する。

窪川鶴次郎の戦時下、六冊の著書に現出する、「知性」、「インテリゲンチヤ」、「知識人」なる語のいかに多いことか。そして、その衰退と欠如の嘆息が大きいことか。しかし、それがいかに実感に乏しく空疎にひびくことか。

旧制高等学校中退、四高以来の僚友中野重治、『ナップ』時代の蔵原惟人、妻の、いね子、そのいずれにも頭が上らず、常に二番手を甘受しななければならなかつた彼の複雑な感情が、こうした無用で背のびしたとしか思えない言葉を吐かせたのかと思うと、同情さえ禁じえない。

この小論の最初に述べたとおり、窪川鶴次郎が、「十二月八日」に「感銘、感動」したことはあつたとしても、そこに苦渋も苦痛もほとんどなかつたことは明白である。それは、彼の「転向」についても、たまたま病氣であり、病氣に甘えて、「それは非常に簡単な気持ちで、転向の決心をしたわけだ。自分自身ではさういふ簡単な取引で済ませるつもりでやったわけで、……」と語る語り口に通じるものがある。「思想」を信じるとは、その程度のことか。

結論的にいえば窪川鶴次郎が、「受け身の抵抗」と、自負し、小田切秀雄が「戦時下の達成」と評価した、主として「大東亜戦争」以前の著作に限定したところで、私にはとてもそのようなことは感じられない。

繰り返えし強調したように、「転向」文学者達が急転直下「民族主義」者に変貌したのとは違い、「純文学の政論

的傾向」を見定めるだけのさめ、眼は持っていた。かつてならい覚えた「政治と文学論」を適当に使い分け、文壇現象を批判し、内外の文献で博引傍証しながら、文壇現象を整理し、あるいは文学史を説き、原理原則や一般論を開陳はした。しかし、戦争への抵抗はおろか、「プロレタリアようご」さえ、彼の著作のどこからも発見することは困難をきわめる。彼が決してフアナチックでなかったことは認める。彼が文壇の「現象」やその現象を「無条件肯定」しなかったことも認める。彼が「反動」文学者を攻撃していたことも認める。だが、彼は民族主義の興隆そのものを批判したこともなければ、戦争自体を否定したことはない。一見批判的に見える彼の饒舌も、それが根本的な批判、否定になっていないから、かえってそれは事態を進めるには好都合である。したがって彼は権力からあまり恐れられていなければ、拒否もされていない。だからこそ、昭和十四年から二十年という、もつとも出版情勢の深刻な時代に六冊もの著書が世に出、あちこちのジャーナリズムからお座敷がかかったのである。

ちなみに、同時代評論家の同じ時期の著作点数は、保田与重郎、二三冊、亀井勝一郎、一一冊、中島健蔵、五冊、中村光夫、四冊、岩上順一、四冊、河盛好蔵、三冊、小林秀雄、三冊である。保田与重郎は別格としても、文芸評論家という小説家と比べて一般に売れ行きの悪い文学者のなかで、彼がどれほど好遇されていたかが、この一点からでも理解できよう。

そして、あの時代に饒舌であったこと、しかもそのことによって花やかな存在を保持しえたこと、それが何を意味したのか、もはや言及の必要はあるまい。

標本的とも云ってよい日本インテリゲンチヤそのものが、結局は本質において、欧米化のマスクをかぶつてゐたにすぎない日本人であり、ひとたび異常な事件に出会へば、直ちに日本人に還元するものである……（中略）そ

れ故に、一見しては、如何にも出鱈目にさへ見える日本インテリゲンチヤの百八十度の転換が、実際にはそれほど心理的な障碍を伴はず、或る者に至っては、一夜のうちに自分で気づかないうちに、魂の内容が変化してゐたとしても、決して無理でもなければ出鱈目でもないのである。……

「転向」、「大東亜戦争」、「敗戦」、この事態をむかえたときの「日本のインテリゲンチヤ」の行動を想起するたびに、この杉山平助（前出）の言葉が思い出される。

注1 「戦後の戦争責任と民主主義文学」（昭31・3『現代詩』）

注2 「文芸学資料月報」（一九三九・一二）『増補転向文学論』所収

注3 「窪川鶴次郎の昭和十年代覚書」（『日本近代文学・第一五集』昭46・10）

注4 筑摩書房版、日本文学大系付載、著作目録による。ただし岩上順一は、彼の年譜による。